

第2章 史跡七尾城跡の概要

第1節 七尾城跡の概要

第1項 七尾城跡

七尾城跡は、石川県七尾市古城町古屋敷町竹町一帯の石動山系の尾根筋に築かれている。標高300mの本丸を軸にした縄張りは、外堀に見立てられる東側の木落川から西側の大谷川までの東西約0.8km、南北約2.5kmの範囲を中心に大小多数の曲輪を連ねるもので、中心部となる本丸周辺の曲輪は石垣で固められている。

七尾城跡は、室町時代中頃の応永15年(1408)に能登国守護職に補任された能登畠山氏が、戦国時代に能登府中に代わる新たな拠点として築いた山城で、上杉氏や前田氏も一時拠点とした歴史性がある。戦国末期に廃城して城跡になってからは、加賀藩が城跡を管理していたこともあり、遺構が良く残っている。特に、山頂の中心部においては、能登の山城にはほとんど見られない石垣が随所に露呈していたことや、本丸から望む風光明媚な七尾湾の風景や上杉謙信との攻防を偲んだ「九月十三夜」の漢詩文などから関心が寄せられ、江戸時代の終わり頃までには、地元の文化人が記した紀行文で紹介される旧跡となり、現在に至っている。

第2項 七尾城下

七尾城下は、標高約45mから約95mの山麓部一帯の古屋敷町から古城町に城郭と連動して形成されている。

城下の実態については、京から下向した禅僧が記した「独楽亭記」などの文献史料や陶磁器類を中心とした採集遺物、農道による地割り、屋敷や寺院に関わる小字名などから、活況を呈する戦国都市であったと推察されていたが、露出遺構がほとんどみられなかったこともあり、長く推論の域にとどまっていた。

こうした状況のもと、解明の扉が開かれたのは、平成3年(1991)に城下北辺部で七尾市が実施したシッケ地区での発掘調査である。同調査では、南北軸の現農道下に重複する石組み側溝を具えた道路跡やその西側に連続する整然とした町屋の遺構群と、土器や漆器などの豊富な遺物群が発見されたことにより、文献資料から推察されてきた城下の姿を彷彿させる遺構や遺物が良好な状態で所在していることが初めて確認された。

シッケ地区の成果を受けて七尾市が開始した確認調査や石川県が実施した緊急調査の成果に基づき、歴史地理学など諸分野の視点も加えた学際的な視点からの分析も行われたことにより、城下のプランや範囲、存続期間や変遷の状況が想定されている。

すなわち、城下域は、東西南北軸の道路(現農道)によって整然とした街区となる町割りが復元される範囲とみられ、東西が東側の木落川から西側の庄津川までの約600m、南北が通称「高屋敷」からシッケ地区付近までの約720mまでが城下の主要域とみなされた。

存続期間については、16世紀前半から末頃に想定され、16世紀後半に城下中央部を東西に横断する切岸と堀による大規模な「惣構え」とみられる外郭施設を構築して、城郭と連動して城下を再編している変遷が確認されている。

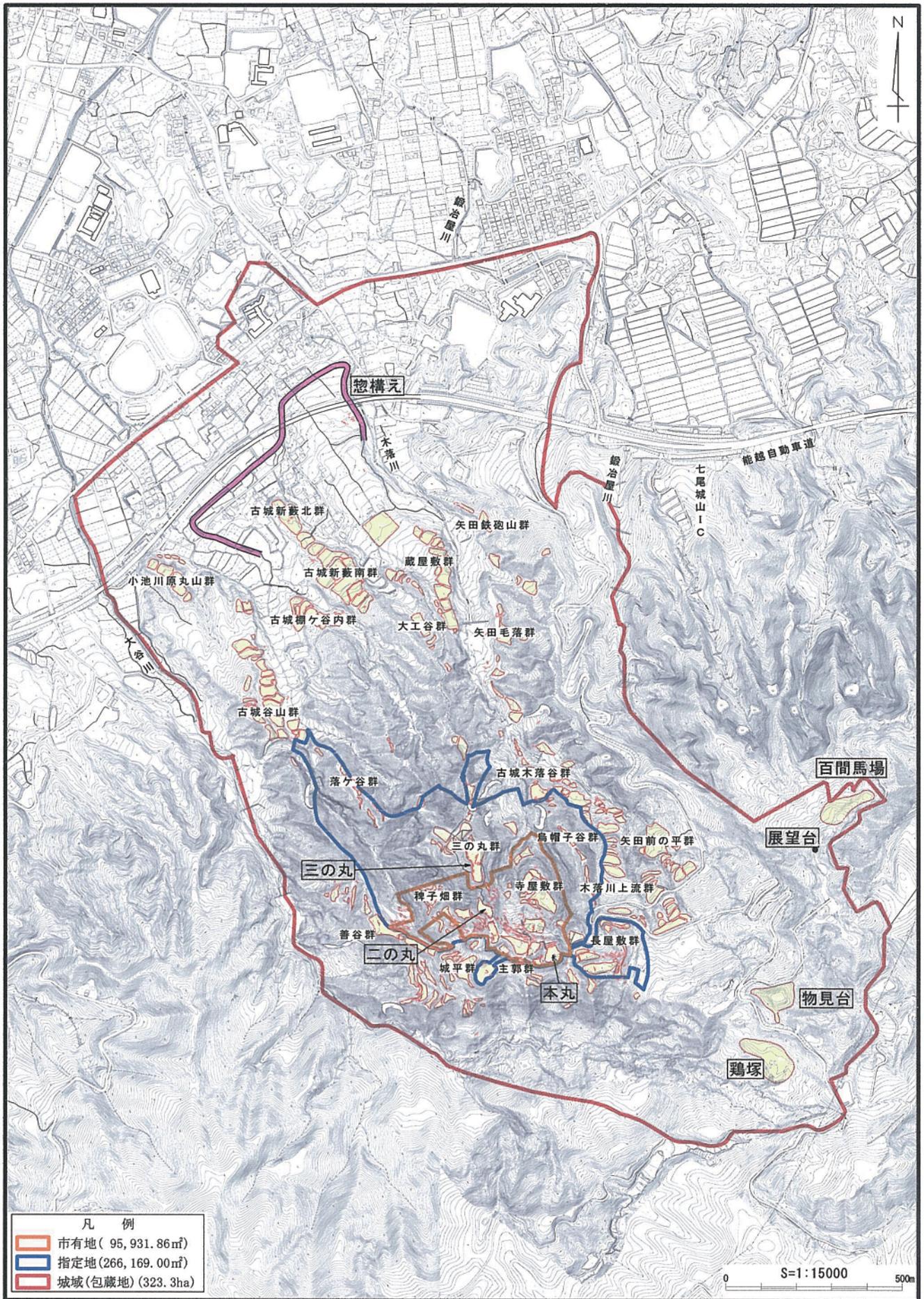


図 12 七尾城跡主要遺構配置図



図 13 七尾城跡垂直写真1 (オルソ図)

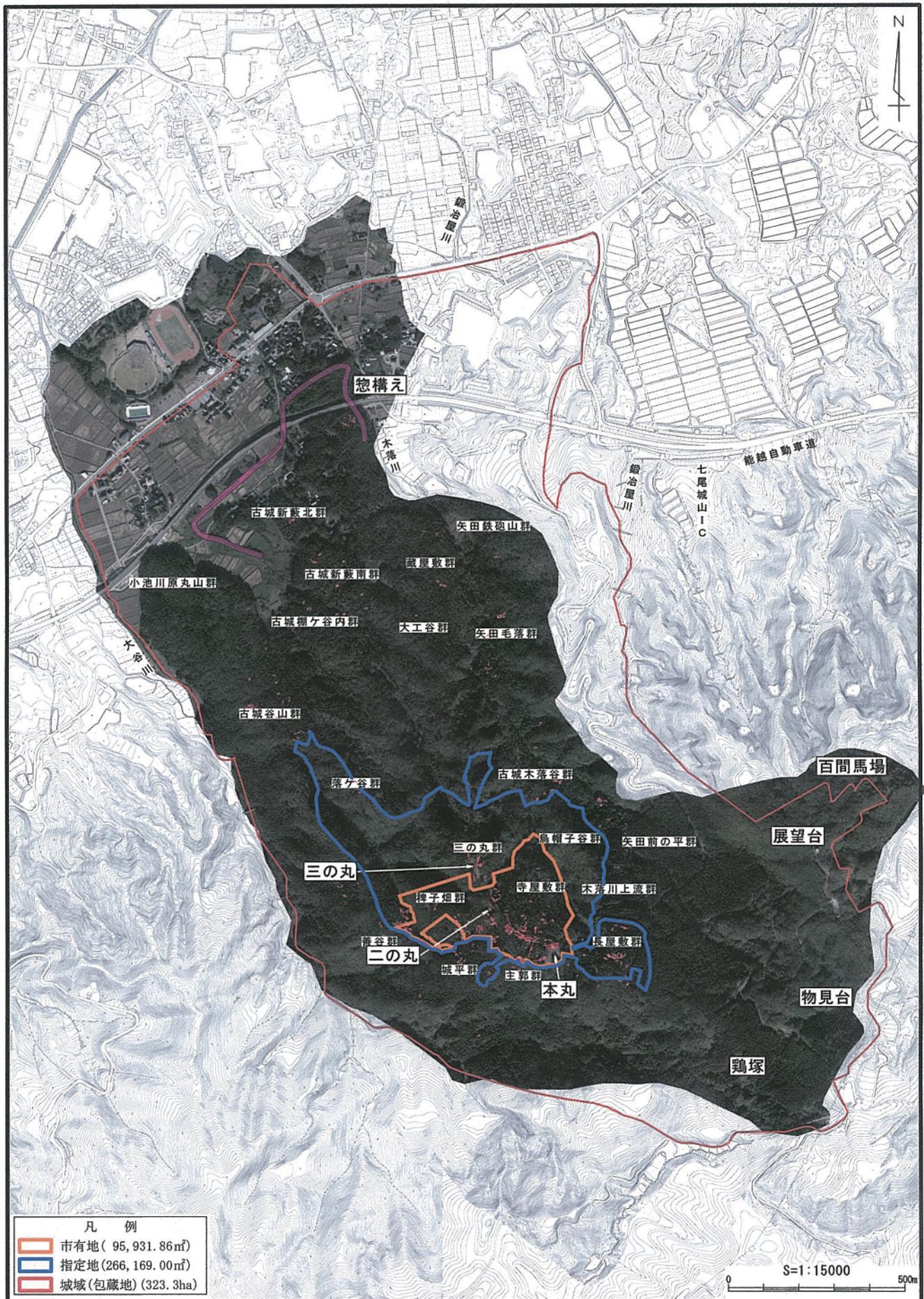


図 14 七尾城跡垂直写真2 (市有地等範囲入)